

山本 公平

一、三瀬川

夕陽は地藏ヶ岳に近づくにつれ赤さを増している。あと小一時間もすれば茜色の残照を残して稜線の蔭に消えていくだろう。やがて山と空との境界が曖昧となって溶け合い、あたり一面が徐々に薄暮となってしまうのも時間の問題だと思える。

目の前を流れる川は明日の朝から鮎釣りを予定している奈良木川ならぎがわのはずなのに、予想に反して川幅が広い。ずっと以前に見たメコン川より大きく、対岸が遠い。いや、遠いというのは正確ではない、夕闇が迫って来ているとはいえ、十分な明るさが残っているにも関わらず、向こう岸が遠くて見えないに等しい。旅館が差し向けてきた車を降りて、

Google mapを確認しながら歩いてきたから、道を間違えるはずもないし、近くに奈良木川とは別な川が流れているということもありえない。なのに、下流をダムで堰き止められてでもいるかのように広い川幅に吉村大輔よしむらだいすけは驚いていた。大河だ。予想を遥かに超えている。

日は西の山脈に沈もうと先を急いでいる。そちらに向かって左手は南、右手が北で川上になるだろうと思うのだが、流れが緩やかだから、川面を見ただけでは流れを確認することはできない。小さな風が川の表面を撫ぜるように吹いていて、魚鱗のように重なり合ったさざなみがキラキラと光っている。浅瀬のわずかな先は水色が群青色に変わっていると

ころを見ると、川は岸边からすぐ先で急な深みになって、流れに穏やかざるものがありそうだ。

〈今日は一日動き回って疲れたな〉

退職してからのこの半年、仕事をしていないのに、ちょっと体を動かただけで疲れるようになった。40年働いて来た疲れが一気に出ているのだろうか。今日からは久しぶりの温泉旅行。ゆったり気分を味わい、リラックスして帰りたい。奈良木川の流れにもう一度目をやる。

地藏ヶ岳の急峻な山裾を流れているからか、目の前に広がる河原には土手がない。流れは川原全体の半分ほどだから、土手は必要ないのだろうか。それとも土手はもっと外側のどこかにあるのだろうか。川に直近した土手道が見当たらない。

流れに沿って南に少し下れば集落があるはずで、そこを目指している地藏ヶ岳・松波温泉。小さな集落ではあるが、グーグルの地図ではコンビニも居酒屋も役場も表示されていた。来た道へ一旦戻って、松波部落へ向かう道を探してみよう。歩いてもらっている。せいぜい10分か15分だろう。さて、と歩き始めたら、川上からボートが下ってくるのが見えた。目を凝らすと、ディーゼルエンジン搭載のロングテールボートに見える。

〈ボートか！〉

船頭が艫ともに立っているのは判別できるのだが、姿や顔貌までは分からない。

「オーイ・・オーイ！」

と声をかけてみたが船頭がこちらに気付いた様子はなく、ズンズンと降って行く。日が落ちれば、川は一気に夕闇に覆われ操舵が難しくなるからだろう、ピアに急いでいると見え

た。松波の集落にピアがあるはずだ。乗せてもらえれば楽ができる。

「オーイ！」声を大きくしてもう一度呼んでみた。船頭はそれにも気づかないでまっすぐ前を見ているようだ。屋根のない船に、船頭以外の人の姿は見えない。それが、突然こちら岸に旋回して来ようとは、たまさか思いもしなかった。

大輔のいる場所を通り越したはずの船がこちらに船首を向けなおし、切っ先で川面を白く切り裂きながら猛烈な勢いで、風のように突き進んでくる。船頭の顔も姿も見え、識別がつくようになると大輔は一瞬腰が抜けそうになり、足が動かなくなった。

「俺を呼んだか？」

船頭は船尾から首を回し、銅鑼のような野太い声で聞いてきた。

「いえっ、呼んでいません」と言ったが、船頭は睨みつけて来る。

「呼ぶ声がしたぞ！俺は忙しいんだ。余計な声掛けをするな！」

一喝されたが、船はゆっくりと退がりながら踵を返そうとする。

「早く行ってくれ！乗りたくない」

心に念ずると、船頭は

「何か言ったか？」と、戻って来ようとする。

「いえ、何も言ってます」

足が震えているのが分かる。心臓も早鐘のように鳴っている。船頭は競泳用のものかと思う小さなパンツしか履いていない。見ようによってはキリリと締めた六尺褌のようでもある。色は黒。上半身裸で肩、腕、胸の筋肉はゴツゴツと盛り上がっている。目が吊り上がり、顔は日焼けして真っ赤だった。眉がない。顔よりもさらに赤みのかかった鉢巻きをし

ている。顔つき体つきは違和感を超えて凄みを帯び、不気味に感じられた。

「今逃げ出したら、逆効果だ。船が去って行くのを見届けてから逃げ出そう」

そう思って船頭から目を逸らしたが、実のところ、逃げたくても腰が抜けていて体が動かないのだった。

船頭は後ろ睨みをしながら船首の流れの中央に向け、来た時と同じ速さで走り去った。

助かった。危なかった。

「あれに乗せられたら、おしまいだった。軽率に声なんか掛けるもんじゃない」

この川は奈良木川でもメコン川でもない。世に言う三瀬川みつせがわではないかと見紛う。下流できつと三本に別れるんだ。急にそんな思いが浮かんできた。それにしても良くぞ揃ったものだと思うが、河原は白と黒の石で埋め尽くされ、そのどれもがやや長細く丸い形をしている。所々に石饅頭のような石積みがあって、河原をいっそう歩きにくい空間にしていた。

二、旅の計画

2017年3月20日、吉村大輔は42年間勤務した丸井物産をこの日付で退職した。会社を辞めた日は一日中、気分爽快だった。20日間の有給休暇消化があるから、実際には

3月初めから出社はしていない。最後の2年間は再雇用で閑職についていたが、以前部下だった人間に指示を仰ぐ立場で働いた。誰もが口を閉ざし、一言も文句を言わずにいる

が、かつて仕事を教えた部下から侮りあなどの言葉を言われることがあって、こんな不条理が世の中にまかり通っていることを不思議に思う日々だった。いくら収入のためとはいえ、我慢のほどもせいぜい2年だ。花形部門の一つ、飼料・穀物本部の次長まで務めたことの

ある身だからね。

2月の最終日に開かれた送別会では花束を抱えきれないほどもらい、タクシーで我が家に凱旋した。と言っても、女房はいないし子供はとくに独立して家を出て行ったから、お疲れ様の一言をかけてくる人間は一人もない。花束をまとめて大きなバケツにぶっ込んで、さっとシャワーをすませるとベッドに横になった。しかし、送別会などいうものはノコノコ出るものじゃない。5人合同の送別会だったが、

「吉村さんが辞めると寂しくなる」という顔をしている人間は1人もいなかった。なんとなく感傷的な気分になっているのは退職組だけで、現職の社員には他人事に写っているのだろう。単なるイベントとと思っている顔だ。いつときのロマンスがあって、肌も触れ合ったことのある塩崎優しおざきゆうさえ、これでスッキリしたという顔つきをしていた。よくもシラツとしていられるものだ。女の方が男より図太いのだろうか。まあ、声をかけられても困るのはこっただけだね。

一切の仕事から解放され、1週間を高揚した気分で過ごした。目覚めて、会社に遅れてはいけない、と無意識に跳ね起きた日もあったが、そんな時には雨戸を音のしないようにゆっくり開け、植木職人の手できれいに刈り込まれたベニアカネの生垣にしばらく目をやり、42年間の日々はもう終わったんだと自らに言い聞かせて心を落ち着かせた。定年退職した後も、鞆を下げて会社の近くまで行き、会社の周りをぐるりと一周してから、公園で新聞を読んで時間を過ごすという笑えない話を聞いたことがある。決してそうはならないと思定めていたのに、気持ちを理解できる今の自分に驚きを感じる。

3月末になって、退職金が振り込まれたのを確認したら、これで会社とは縁が切れた

のだと実感した。同時に、少し元気が出て、若い頃から一度行ってみたいと思って計画したことのあるバルカン半島の旅を決行しようという気が起きた。今行っておかないと、行けなくなるだろうと思え、さっそくガイドブックを買いに出た。この身軽さは单身、リタイア、64歳のフットワークの良さによるもの。誰にも頼らず、誰にも邪魔されることのない「ひとり旅」を計画するつもりになっていた。

待望の年金は来年65歳になってから受け取るつもりだ。企業年金は今年から受け取れるから、厚生年金と合算すればある程度の暮らしはできるだろうと踏んでいる。手元の預金を取り崩しながら1年間をもちこたえ、退職金には手をつけないでおくつもりでいる。不要不急の金は使わないように心がけながらも、海外旅行には年に一度くらい出たい。年金を繰下げて受け取るのを喧伝する向きもあるが、年金を一度も受け取らずに死んだ先輩がいることを知っている。命の長短を賭けの対象にはしたくない。送別会に参加した5人は年齢こそそれぞれだったが、年金の受け取りについては同じことを考えていた。

「自分が誰だかわからなくなってから年金を受け取ってもしょうがねえだろう」という同僚がいた。すでに深刻な病気を抱えている人も一緒の退職者だった。みんな40年以上保険金を払い続けて来たのだ。

旅のガイドブックをかうと決めたは良いが、最寄り駅の周辺にあった3軒の本屋はこの10年のうちに全部閉店になって、そのあとには100円ショップが1軒、ドラッグストアと居酒屋がそれぞれ1軒出店している。本をかうには3つ先の急行停車駅まで行かなければならない。そこでさえ、2軒の大型書店のうち、1軒が閉鎖になっている。

手にしたのは旅行ガイドの定番「地球の歩き方・中欧編」。

書店の棚から取り出してパラパラとページをめくった時からワクワク感が始まった。立ち読みのこの高揚感はネットでの書籍購入では味わえない。ベオグラードを最終目的地にしてバルカン半島を回ってみたい。と言っても、ユーゴスラビアという国は、今では7つの国に分かれている。かつて国が一つにまとまっていた時、ベオグラードは首都だった。これと言った理由はないのだが名前に惹きつけられるものがある。コソボ紛争ではNATO軍の爆撃を受けている街だ。国が解体する前、ユーゴスラビアはチトーという稀代の指導者を輩出している。いったい、どんな国、どんな街だろう、その程度の漠然とした憧れのようなものがあつたに過ぎないが最終目的地はベオグラードと決めた。

三、バルカン半島

トルコ航空、初めて乗る飛行機だ。

成田空港からイスタンブールに飛び、乗り継いでアテネで2泊、アテネからはギリシャ北部の街テッサロニキへ列車で移動した。そこから国境を超えてスコピエ(マケドニア)にバスと鉄道で移動したのだが、後で触れたいが、問題ありの移動になった。この時のトラブルの経験がベオグラードに着くまで、あるいは着いてからも気になっていた。何回か咀嚼して考えたが、奈良木川につながる不思議な体験の始まりであつた。

スコピエからコソボの首都プリシュティナにはバスで移動。プリシュティナから先の移動にも長距離バスを使った。国境をバスや列車で超えるのも今度の旅行の一興だったのだ。ポトゴリツァー、コトルというモンテネグロの二つの街を縦・横に移動し、ドブロブニク(クロアチア)へ回った。どこの街にもローマ帝国時代からの歴史があり、オールド

タウンと称するところには中世の面影が残っていた。いくつかは、街全体が世界遺産に登録されていた。1キロ四方の狭い地域にキリスト教会と、キリスト教正教会、イスラム教のモスクが並立しているのを見ただけでもバルカン半島の民族の融合と対立の複雑な歴史を垣間見ることができる。ユーゴスラビア紛争、ボスニア紛争の傷跡が残された町もいくつか通過した。紛争から20年近くなろうとしている今でも砲弾の跡が残されたビルがあった。家族や友人を亡くした人々の心にはビルや歴史的建造物の破壊以上に深い、心の傷が残されただろうと思えた。

とはいえ、戦争の傷跡を見に来たわけではない。目的の街でそれぞれ2泊、3泊しながら、のんびり移動する旅で、目的はあくまで観光。気楽な一人旅だが、話し相手がいないというのは時に寂しさもある。素晴らしい景色を見ても〈ステキだ〉と心に短く叫ぶだけ。食事がおいしくても黙って食べるだけ。一番困るのは乗り物で、おちおち寝ていられないこと。目的地が終点の場合ならともかく、途中下車の場合、降りる予定のところを通り過ぎてしまうと厄介なことになる。それでも、揺られていると我慢が効かないほどに眠くなる。一人旅はこれが一番困る。

現地の言葉が分からないから、誰にでも気軽に話しかけるわけにもいかない。黙って景色を眺めているのはいいが、東洋系のオヤジが一人で旅をしているのがどうも胡散臭いと思われるのか、チラチラと目線が来るのには閉口する。

で、行くところといえば博物館、美術館、城砦や教会、公園といった類で、ガイドブックに紹介されている観光名所、おすすめのスポットばかりになる。これが毎日続くとさすがに飽きがくる。歴史博物館で古代人の骨を見たときには、

へここまで来て何で人の骨を見なきゃならないんだ」という自己嫌悪に陥った。

日本を発ったのが4月21日、最終目的地のベオグラードに着いたのは5月13日だった。ドブロブニクでの滞在の後、ボスニア・ヘルツェゴビナに入国し、モスタルとサラエボに寄った。バルカン半島を巡る旅とはいえ、随分と回り道をしたものだ。サラエボから目的地のベオグラードには飛行機で移動したのだった。セルビア航空。バルカン半島にでも来なければ乗ることのない航空会社を使った。

ベオグラード空港から市街にはシャトルバスに乗った。終点のバスセンターで降りると、その真後ろが鉄道駅でベオグラード本駅になる。予約したホテルは駅前広場を横切った真正面にあった。本駅を中心に市街地が広がり、ホテルから官庁街や街の中心部に向かう道路は緩やかな上り坂、駅の裏手に立地する市街地に行くにはサバ川に掛かる橋を渡って行く。期待感充分だ。初日はホテルの近辺を散策して終わった。

2日目。

バルカン半島の春は遅い。風が冷たく街を吹き抜けていた。本駅を左手に見ながらバスターミナルを回り込むようにして歩くこと10分。アーチ型の大きな橋の袂に出た。そこはブランコ橋。川は大河で、川幅は目測で500メートルはあるだろうと思えた。橋から少し離れた下流に船着場が見える。中型の客船と思しき船が3艘舳っているのが見えたが、そのうちの一艘は船腹が金色に塗装されていて、眩しく光っていた。

サバ川の右岸に近い丘に登る。

登り切ったところがセルビア正教大聖堂。

カルメグダン公園はそこから歩いて5分ほどで行き着く。公園は松の並木道が続き、日差しが木の影を黒々と地面に写し出していた。松並木の先に、煉瓦造りの時計塔が最初に見え、巨大な要塞が続いていた。お目当てのオスマン帝国時代の城砦だ。

砦の真下はサバ川とドナウ川との合流点で、二筋の川は大きな中州を作って一本の太い流れになっていた。その右手向こうは青緑の樹林地帯が果てしなく続き、遙か彼方で地平線をなしていた。

サバ川河岸にはレストランが軒を連ねている。川に迫り出している店もある。店の前に金色に塗装された船が一艘見えた。さっき船着場で見かけたのが移動して来たのだろうか、あるいは別の船なのか、判別しにくい。船の色が金色というのもベオグラードの特有なのだろうか、日本では見かけた事がない。金色の塗装部分は喫水線までで、その下は赤く塗装されている。喫水線の下部分が丸見えなのは船に荷物が乗っていないからだろう。

空の青、樹々の緑、澄明な川。それらが互いに溶け合った配色をなしているのに、金色の船はいかにも釣り合いが悪い。しかし、人を惹きつける色ではある。

ドナウ川を見たことで、この旅の目的をひとつ達した気分になり、気分は落ち着いていた。2日後には日本に戻る。勢い、今度の旅を振り返る気になった。ここが旅の終点だと思ふと、寂しささへ感じてしまう。

四、消えた老人

後ろから誰かに見られているような気がして、振り返った。5、6メートルほど離れた先を老人がこちらに背を向けて歩いて行くところで、少し前かがみで急ぎ足の姿があっ

た。後ろから見た感じでは体が右に斜傾して歩き方もどこかぎこちない。足を引きながらの歩き方に見えた。俯向いて歩く老人の姿は弱々しいが、どこかで見かけたような気がする。髪は白い。

〈まさか！！〉

叫びそうになった。

その老人！テッサロニキからスコピエに移動する、そう、あの時にも見かけたような気がした。一度はバスを降りた所で、もう一度は列車の中で。姿をすっかり見たわけではなかったが、いま背を向けて歩いている老人はあの時見た人に違いがないように思えた。

〈あの老人、やっぱり、国へ帰るところだったんだ。セルビアの人なんだ。俺は回り道してきたけど、老人はベオグラードに直行したんだ〉

理由があったわけではないが、そう考えるのが自然に思えた。

〈声をかけてみよう〉

砦を離れ、老人にいいよ追いつこうとした刹那、老人はサッと右に折れ、公衆トイレに入ってしまった。足が不自由そうに見えた割に身のこなしは素早かった。吉村はそこに立ち尽くした。

〈もし、あの老人なら、お礼を言わなくちゃ〉

ところが、老人はトイレからなかなか出てこなかった。さらに辛抱して待ったが、姿を見せない。

〈トイレで具合でも悪くなったのだろうか〉

心配になってきた。例えば老人がああ時の老人でなかったとしても、これは長すぎるじゃない

いか。

時間はどんどん過ぎて行く。とうとう堪えきれず、トイレの中に入って声をかけた。

〈Hallow-- Is there somebody--〉

何の声も、なんの音もない。

「ハロー！」

かなり大きな声を出した。男性用のアサガオの列に人の姿はない。大使用のドアは4つ。一つずつをノックし、覗いた。誰もいない。納得がいかない。消える訳がない。

へトイレに入る後ろ姿をしっかりと見たはずだ

しばらくトイレの横に立って、ぼんやりしていたが、元の砦に戻ってみた。さっきまで見ていた同じドナウ川だが、感動は失われ、老人の行方が重くのし掛かって来た。ギリシャのテッサロニキでの出来事、そこからマケドニアのスコピエに移動したドタバタを思い出していた。そのドタバタ劇に老人の影が見え隠れしていたのを記憶している。あれはなんだったのだろう。

五、スコピエ行きチケット

テッサロニキを発つ日だった。

朝から小糠のような冷たい雨が湾の姿を輪郭のないものにしていた。テッサロニキはエーゲ海に面したギリシャ最北部にある街で、入江が深いから湾には波らしい波というものがない。まるで鏡のような水面で、大きな湖のように見える。

テッサロニキを出る列車は夕方の6時10分。それまで、時間はたっぷりある。ホテル

をチェックアウトし、近所の市場をブラついた。休み明けだったからか、魚売り場も野菜・果物売り場も客が多く、売り子の掛け声に勢いがあって、市場は活気に満ちていた。豚肉の半丸が天井の銀屋根から下げられたワイヤーに鉄のフックでぶら下がっているのも迫力だった。

市場から鉄道駅に路線バスで移動した。おととい、駅の窓口で買ったチケットを手にしている。このチケットを入手するまでのひと騒動を思うと、思わず満足感が湧いてくる。昨日、一日中落ち着いて市内散策できたのもこのチケットが手にあったからだった。おとといのことは、今までの旅で経験したことのないドタバタだった。

テッサロニキでは四つ星ホテルに泊まっていた。部屋は広く、清潔感があり、スタッフはいつも笑顔で気さくな態度で接してくれる。いかにも世話好きそうな女性にスコピエ行きのチケットのことを尋ねた。

「バスがあるはずよ。チケットはバスセンターで買ったらかしら」

見立て通りの優しい応対だ。嬉しくなって、国際線のバスセンターまで市内循環バスを使って出かけて行ったが、窓口では

「今はシーズンオフだから取り扱っていない」と言われてしまった。ホテルに戻ってそのスタッフに報告すると、

「そうでしたか・・・、鉄道駅の近くにあるバスツアーの売り場で扱ってないかしら。私が電話で聞いておきますから、後ほど声かけてください」とこれまた親切的な応対だった。

1時間もしないうちにフロントから件のスタッフが部屋に電話をよこして

「扱っているそうです。あなたの名前を言っておきました」

とのこと、一件落着したかに思えた。

何はともあれ、スコピエ行きの手配を押さえた一心で、チケット売り場まで出向くと、いとも簡単にチケットの手配をしてくれた。ありがたや、と思ってチケットを見たら、日帰りバスツアーのチケットだった。行き先はスコピエとは違う街の名前になっていた。スコピエ行きの片道チケットに直してもらおうとしたら、

「テッサロニキではそういうチケットを扱っているところはありません」と言う。

「じゃあ、このチケットを使って終点で降りてしまうのはできる？」

「それはできません。これは日帰り入出国用で、国境のイミグレーションでパスポートを預けなければなりません。同じバスで戻っていただきます」

冷たい言い方だった。もう取り付く島がない。

戻ってもう一度ホテルのスタッフに相談してみたが、3度目の仏の顔は見せなかった。

「旅行社のメールアドレスをお教えます。ここはテッサロニキでは最大手です。ホームページもメモしてお渡ししますから自分でウェブに繋いでください」

今までと打って変わって、かなり突き放した言い方をしてきた。

「もう諦めたらどうですか」と顔に書いてあった。

部屋でネットに繋いでもホームページのトップ画面が出るだけで、チケット申し込みの画面は出てこない。メールは何度トライしてもエラーで戻ってくる。ホームページに住所が記載されていたから、Googleの地図を頼りに直接訪ねることにした。

15分ほど歩いてその旅行社を見つけたが、シャッターが閉まっていた。

もう絶望だ。

バルカン半島の旅は頓挫したのか。

呆然とシャッターを眺めていると、男の子が2人、中学生に小学生といった感じだったが、大輔の方に歩いてくるのが見えた。2人はぼんやりと突っ立っている東洋系の老人に珍しげな視線をよこしながら、互いに言葉を交わし合い、笑みを残して通り過ぎて行く。通り過ぎてすぐ、小さい方の子が突然止まって振り返った。

「どうしたの？」

小学生くらいなのに英語がわかるらしい。

「・・・えっ！おじさんか？チケットを買いに来ただけだな、この店が閉まっっていてガツカリしているところさ」と答えた。その子は理解したらしく、お兄ちゃんの手を揺すった。

「どこへ行くチケットですか？」

兄貴分が聞いてくる。声変わったばかりの少年の声だった。

大輔は急に不安な気持ちになった。騙しの新しい手口かと身構える。

「ウチのパパ、旅行社で働いているんだよ」

大輔の訝しい顔に気づいたらしく、下の子が説明する。この子達、英語で日常を過ごしているらしい。

「兄ちゃん、パパに電話してあげなよ」と兄貴の顔を見上げながら言うと言兄の方が携帯電話を取り出した。指でチョンチョンしながらそばに寄ってきて、スマホ画面の写真を見せてくれた。家族で撮った集合写真でこの子らの肩に手を置いている男性が父親なのだろう。

う。他に母親らしい女性と男女1組の老人が写り込んでいた。しかし、写真の画面は小さく、顔までは良くわからなかった。

「ちょっと待ってね」

兄貴分が親に電話しているようだ。相手と短く話をする、繋がった電話を大輔によこした。

「どうしました？」

声はかなり年配の人のように感じた。大輔はこの間の経過を説明し、あさってスコピエに行きたいがチケットが取れていない事情を説明した。

「そうですか、それは難儀でした。鉄道駅の窓口に「International」と言うセクションがあります。チケット売り場の一番左はずれです。目につきにくいでしょうが注意深く見てください。そこで聞いてみるといいですよ。スコピエ行きの鉄道乗車券が買えるはずですよ。分からなかったら、窓口の人にゲロスから聞いて来たと言ってください」と言う。音声はかなりのお年の人を感じた。写真に写っていた老人のかなと思いつつ、

「ありがとうございます」と言いつて電話を兄貴分に戻したが、にわかには信じられない。信用できるアドバイスとも思えなかった。2人の子供たちは電話を受け取ると互いに顔を見合わせ、走り去って行った。詐欺の新しい手口かと疑ったことをチョッピリ恥じた。

電話で聞いた情報がイマイチ信頼性に乏しいとはいえ、これ一択しかない。とりあえず鉄道駅に行ってみることにして、流しのタクシーに乗った。駅は閑散としていてチケットを買う客の姿はほんの2・3人しか見かけない。

「International」と書かれた窓口を見つけ、

「スコピエ行きの列車はないでしょうか」と恐る恐る聞いた。

「何日ですか？」ときた。

驚きと喜びと、そこへ不安を混ぜこぜにした声で答えていた。

「4月28日です」と。

「何時発？」

「何時があるんでしょうか？」

「朝の7時と夕方6時ね」

「では夕方の列車をお願いします」

「はい、では4月28日、18時20分発、スコピエ行き。お名前は？」

で、パスポートを見せた。中年の女性スタッフは手際良くチケットの処理をしてくれている。天にも登る気分だった。手渡されたチケットには列車のマークが付いていて、コンパートメントの番号も記載されていた。テッサロニキ18時10分発。紛れもない、鉄道チケットだ。

六、混迷の始まり

テッサロニキからスコピエ行きの飛行機がないことはガイドブックを読んで知っていた。しかし、「地球の歩き方」にはテッサロニキ／スコピエ間には列車が1日1便、所要4時間25分。バスが1日2便、所要3時間30分と案内されていたから、チケットの入手にてこずるとは想像もしていなかった。

ギリシャとマケドニアは国境を接しているのだが、どのガイドブックを見ても仲が悪い

と案内されていた。マケドニアという古代の国家はギリシャの内陸部とブルガリアの西部を含んだかなり広い地域で、何せ紀元前330年のことだから、マケドニアといっても今になれば境界は曖昧になる。ところがギリシャの人々は隣接する国がマケドニアを名乗っていることを不快に感じていて、両国を結ぶ鉄道も国境で閉鎖されていることを後になつて知った。

東洋からの旅行者がマケドニアを訪問することにホテルのスタッフも、バスセンターのスタッフも快く手を貸す気になれなかったのだろう。自分が行ってみたいとも思っていないし、行ったこともないのだ。

そんな国家間のトラブルや民族意識に関係なく、スコピエ行きのチケットは今、手中にある。幸福な気分だった。市場をぶらついて昼食を済ませ、路線バスに乗った時はすこぶるつきの上機嫌だった。

〈列車でスコピエに行ける〉

それを考えただけで、満足感が高まってくる。

〈色々あったけど、うまく行ったから、まあ、いいか〉

全て許せる気分鉄道駅に着いた。出発にはまだ時間があつたが、何番線から出るのかを知りたくて窓口に行った。

「スコピエ行きの列車は何番線から出ますか？」

「スコピエ行き？そんな列車はないよ」

いきなり冷や水をぶっかけられた。そんな！・・・おととい手にしたチケットを見せた。

「うーん、これか！これは、あんた。列車のチケットじゃないよ」

一瞬冗談を言っているのかと思ってしまった。言葉が出てこない。一昨日、ここの窓口で12:20ユーロを払って買ったものだ。列車の乗車券だと念押しもした。

「じゃあ、何のチケットですか」

自分でもバカな質問をしていると思った。

「これ？これはバスのチケットだよ」

おちよくられているかと思ったが、聞いた。

「バスはどこから出るんですか？」

「外だ」

「外って、・・・どこですか？」

「駅を出て、ビルが一番左手の奥だ」

実に誠意のない応答だった。チケットを詳細に見れば、手書きではあるが、日付(4／

28)、時刻(18:10)、列車(334)となっていて、その隣の項目に大型バスのマークがあり

(dfu)か(4f0)と、読み取りにくい文字が書き込まれている。

奥の手と思って、

「このチケットのことはゲロスさんに紹介されたんだ」と言ってみた。

窓口の担当は一瞬ドキリとしたようだったが、大口を開けて笑った。

「ゲロスさんか！そりゃあ良い！ ははは・・・。バス乗り場はな、この建物に沿って

左手の一番奥にある。ロータリーになっているところだ」

と言い直してくれた。しかし、笑いを堪えている。

「あんだ、それは良いけどな、ゲロスと言うのはギリシャ語で老人っていう意味だぜ」

と言ってもう一度笑った。吉村はあっけにとられていた。

チケットの左上にはハッキリと太文字で「TRAIN」と表記されていて、ギリシャ語は分からないけど、これって、英語の「TRAIN」じゃないのか！何が何だか、訳がわからない。

窓口のお兄さんはまだ笑っていたが、もう用事は済んだと言う態度であっちの方を向いてしまった。かなり惨めな気持ちで歩いた。駅ビルは横に長い。どこまで建物が続いているんだ、と思っているうちにビルが途切れてバス停らしきスペースにたどり着いた。しかし、誰もいない。

18時になって、ポツポツと乗客らしい人達が集まり始めた。そこへ大型バスが入ってきて、客たちは勝手に乗り込み、好きな席を確保していく。ドライバーは運転席から降りて、外でタバコをふかしているが、乗り込む人たちに全く関心を示さない。乗車券の確認もしない。大輔も乗り込んで席を確保したが、女性の3人組、バックパッカーらしき若い男性の2人組、若いカップル、それに東洋から来た老人一人が乗ると、ドライバーは運転席に戻り、合図も点検もなくバスを出発させた。もう、なるようにしかならない。

4月のギリシャは暮れるのが早い。

瞬く間に外の景色は夕闇となり、バスは街路灯の点るテッサロニキの街を離れて行く。女性3人組と若者2人組は談笑を始めていた。若者たちは初めてのギリシャらしく、このバスに乗ったのも初めてという感じだった。3人の女性たちは何度かこのバスに乗っているようで、若者が取り出した地図を見ながら道行きの説明をしている。それに混じって説明を聞きたかったが、なぜか気後れして足が出なかった。

七、夜行列車は行く

1時間半走ったところで、バスが止まった。

目の前に煌々と明かりをつけた大型のゲートが迫っていた。車が通過できるレーンが

10コースほど見えていて、それぞれにブースが設けられている。一見、高速道路の料金所のように見えるが、そこが国境の検問所だと想像がついた。バスの運転手はここで予想外に機敏な動きを見せ、全員からパスポートを集めると、出国・入国の手続きを代行してくれた。パスポートに押されたスタンプを見てマケドニア入りしたことが分かった。手続きを終え、検問所を通過して、狭隘な脇道に逸れたバスは5分と走らないうちに再度停車した。外は漆黒の闇で、明かりといえばバスの車内灯の弱い光だけ。何も見えない。どうやらバスは畑の脇道に止まっているようだった。

運転手が降りて、格納トランクから乗客の荷物を取り出している。大輔はバスの中から運転手の動作を眺めていたが、自分の旅行バッグも道路上に出されていた。7人の乗客は荷物を手にすると闇の中に次々と消えて行く。運転手が乗り込んできて、

「バスはここまでだ」と宣言した。

へここまで？何でだよ！この暗がりの中に降りるのかよ

とんでもないところに來てしまった気がした。さっきまで一緒だった乗客たちは何のためらいもなく、荷物を引きずって闇の中を歩いて行く。先頭の人もう見えなくなっていた。仕方なく降りて荷物を取ろうとした時、今までバスには乗っていなかったはずの老人が暗闇から急に出てきて荷物を手渡してくれた。

「あの人たちの後ろについて行きなさい」

と言ったような気がしたが、老人は暗い闇を目で示しただけだった。バス会社の案内人か
と思ったが、先を行く人たちはズンズン離れて行く。

「おおい、待ってくれ」

叫びたい気持ちだった。先に行くぼんやりとした人影を確認し、もう一度その老人を見よ
うとしたが、そこにはもう誰もいなかった。バスはゆっくりと動き出し、しばらくすると
スピードを上げて走り去った。老人はバスに乗ったのか。

闇の世界を速度を落としもせず進んでいく乗客の姿を見失わないようにしながら5分ほ
ど歩くと、前を歩いていた全員が思い思いに暗闇の中に突っ立っていた。幅の狭い道は幸
い一本道だった。少し離れたところに煉瓦造りの平屋の建物があって、中から蛍光灯の淡
い光が漏れている。近づいてみると、倉庫のようにもオフィスのようにも見える。薄あか
りがさびれた廊下をぼんやりと照らし出していた。その奥に目をやったが、薄暗がりがあ
るだけで人がいる気配はなかった。いったい何の建物だろう、街灯もない。入り口がどこ
なのかも分らない。あれこれ想像をしているところへ、闇の中から赤いテールランプを
つけた列車がバックしながら入ってきた。赤いランプの下に見えたのは鉄路で、みんなが
手持ちぶさたに立っていたところ、地面からわずか10センチほどの高さのあるその場所
はプラットホームだったのだ。入ってきた列車はマケドニアの国鉄列車だった。

コンパートメントの65番席は乗り込んで直ぐに見つかった。6人がけの席に大輔一人
だった。3人組の女性は少し離れた部屋でもう寝る体制になっていたし、若者2人は同じ
コンパートメントには見かけなかった。カップルも別な車両のようだ。車両の入り口ドア

に張り紙があって、「テッサロニキ／スコピエ」と英文で表示されていたのを確認でき

た。自分の席のあるこの車両が334号車両で、スコピエへ行くのだと確信した。疲れが
一気に来た。しかし油断はならない。列車そのものはどこへ行くのか分かっていないし、
連結がどこで切られるかも分からない。スコピエの到着時間だって不明だ。

列車は途中いくつかの駅で停車するのだが、停車時間が極端に短い。それにどこの駅舎
も真っ暗で、駅名もわからない。仮に表札があったとしても、マケドニア語表示で大輔に
は読めなかっただろう。そうすると、おちおち寝てはいられないのに、夕方からの疲れ
で、睡魔が襲ってくる。いくつもの駅を通過したのは薄ぼんやりと分かっていたが、目が
開けられなかった。

隣のコンパートメントがうるさくノックしてくる。コンコン、コンコン。

ハッと目が覚めて辺りを見たら、列車は大きな駅のプラットホームに入って行くところ
だった。途中でいくつか見かけた暗闇の駅舎とは異質な明るさで、想像ではあるが、時間
からしてスコピエに着いてもおかしくない時間だ。リックを背負い、カバンを引きずりな
がら出ようとする時、うるさくノックしてきた隣のコンパートメントの乗客がドアの窓か
らチラリと見えた。老人だった。頭を腕で抱えるようにしながら俯き加減の姿勢で座って
いる。

へノックをありがとう

と言いたかったが、老人は俯いたままでこちらをみる気配がない。停車時間が短いのはわ
かっている。大輔は慌ただしく降りてしまった。そこがスコピエ駅だと確認するものは何
もなかった。それでも自信を持って降りられたのが今になって思えば不思議だ。だって、

ホームには何の表示もなく、そこで降りた乗客も大輔一人だったのだ。薄い明かりがホームを照らしていたが、駅舎は見当たらない。ホームにも改札口にも駅員の姿はなかった。列車のチケットは記念品のように大輔の手に残された。

八、白タク

改札口の手前が少し広くなっていて、左手に待合室らしい部屋が見えた。そこにも駅員の姿はなかった。代わって、大輔に近寄って来たのは白タクの運転手だった。

「どこへ行く？」

白タクドライバー定番の質問だ。こういうのはどうやら世界共通のようだ。返事をせず、無視する構えていたが、そのドライバー以外、人の気配がない。しばらくの沈黙の後、

「スコピエ・ラックランドホテルだ」と答えた。

「知っている。俺の車に乗れ」

「いくらだ」

「・・・まあ、いいから乗れよ」

「いくらで行く？」

「500デナリだ」

中央駅から歩いて行ける距離のはず。しかし、わかっていることは二つだけ。ドライバーの言い値は通常料金の倍以上だろうということ。もう一つは、外は真っ暗でどこがどこやら分からないということ。

「じゃあ、行くか」

その時は何も考えずに白タクに乗り込んだのだが、実に大胆な行動だったと思う。

白タクの運転手は駅前に駐車していた車に大輔を乗せると発車した。ホテルに向かっているのかもわからなかったが、不思議に何の恐れも感じなかった。街並みに街灯らしきものはなく、建物からこぼれる灯の光もない。暗闇を照らしているタクシーのヘッドライトも、心なしか薄明かりに見える。

「オマエ、デナリ持ってるか？」

いきなりドライバーが聞いてきた。

「さっきスコピエに着いたばかりだろ、持っていないよ」

というと、

「そうか、A T Mの前で停まるからな、そこでデナリを引き出してくれ」

言うや否や、10メートルも走らない内に停車して、

「あそこのA T Mで、引き出してくれ」ときた。

A T Mは24時間営業らしい。クレジットカードを差し込んで暗証番号を押す。

へこのカードは利用できません」というメッセージが出た。

もう一度やり直す。同じメッセージだ。

そうしているうちにドライバーがイラついて降りてきた。

「どうした」

「エラーが出る」

「もう一度トライしてみろ」

言われるままにカードを差し込み直し、ドライバーが覗き見しているのも構わず、暗証番号

を押す。

メッセージは同じだった。

「オマエ、残高がないのか？」

ドライバーは明らかに不快な顔をした。

「ユーロで払う」

ドライバーは無言で車に戻った。大輔も乗り込んで再出発したが、二人の間には大きな溝ができていた。

「車はここまでだ。この先のネオンの見えているところがラックランドホテルだ。車は広場には入れない」

ドライバーが車から降りてトランクから荷物を取り出した。そこがガイドブックに載っていたマケドニア広場ではないかと見当をつけた。

支払いをしようとしたが、大輔はユーロの小額紙幣がないことに気がついた。テッサロニキの駅でハンバーガーを買った時に小銭をほとんど使ってしまった。500デナリは8ユーロくらいかと計算し、

「8ユーロ払う」と言って10ユーロ札（1400円相当）を渡した。

「お釣りか・・・」

と言ってドライバーはユーロ札をズボンのポケットに振り込み、お釣りを渡すそぶりですぐケットをゴソゴソ探る。釣り銭のつमりのデナリ札をつかみ出し、一拍を置いて、

「えーと、待てよ、・・・未だ料金もらってなかったな」

と言いだした。たった今、ユーロ札を渡したばかりだ。白タク特有の手口だと思ったが、

ドライバーがポケットから取り出して手に握ったデナリ札の中に、さっき渡したばかりの真新しい10ユーロ札の切片が白く顔を出していた。

「その10ユーロを渡しただろう！」

大輔にしては強い口調だったが、その言葉を後ろから押すように一陣の風が二人の間を吹き抜け、わずかな先で小さい渦をつくって消えた。風をやり過ぎす一瞬の瞬きのうちに車のヘッドランプが点滅したように見えた。

「こんな夜中に、なんで人が歩いているんだ。えええ？」

ドライバーがこちらを見てつぶやく。真っ暗闇の中、目の慣れない大輔に人影は見えなかった。

「誰かいたのか？」

と応答したが、ドライバーは渋い顔をし、次にはバツの悪い顔を見せて、汗で湿ったような札を2枚よこした。正当な釣り銭だったかどうかは不明だったが、ホテルは駅から歩いて15分か20分程度の距離のはず。

予約しておいたラックランド・ホテルは広場を横切った先にあったが、玄関は格子状の鉄の扉で閉められ、鍵がかかっていた。ドアはビクともしない。何度か呼び鈴を押すとホテルの受付嬢が階段を降りて来て鉄格子の向こうから声をかけてきた。

「予約の方？お名前は？」

こちらの名前を名乗ると

「では、3階のリセプションまで上がってください」

と言って鉄の扉を開けた。どうぞという素振りで大輔を迎え入れ、エレベーターホールへ

と大輔を導いた。

どうやら泊まれそうだ。

長い1日だった。

部屋に入ってカーテンを開けるとマケドニア広場が目の前に広がり、中央部に裸馬に乗ったアレキサンダー大王の銅像が見えていた。短剣を天に突き刺し、まさに突撃命令を発している騎馬像で高校の教科書に載っていた写真の通りだった。大王像だけがライトアップされ煌々とした明かりの下にあった。

九、老人再発見

大輔はテッサロニキからスコピエに移動した日のことを誰かに聞いて欲しかった。バスを降りた時の老人、隣のコンパートメントに座っていた老人、子供たちが見せてくれたスマホの家族写真の中の老人。それにさっきトイレに消えた老人。こう言う時、一人の旅は内に籠もってしまうから、フラストレーションになる。ドナウをぼんやりと眺めている自分が果てしない孤独に苛まれているような気がしてしまった。気分は重苦しい。

ようやく、砦の坂を下りて聖ペトカ教会を覗いてみることにした。聖ペトカ教会は公園の中の小さな教会で、とんがり帽子の赤い六角屋根がかわいい。塔の先端には金色の十字架が光っていた。小さな教会は身動きできない人で埋まっていた。最後尾の壁際に潜り込んだが、隣の人の肩が触れる。聖書の朗読なのか、説教なのか、司祭のハリのある声が聞こえていた。残念だが、意味がわからない。何語なのかさえ不明なのだ。しかし、教会にいる人々は一様にうなだれ、咳き一つなく、一語も聞き漏らすまいとしている。司祭の

言葉が途切れたと思うや、少年聖歌隊の歌声が堂宇に満ちた。汚れない水晶のような声。しばらく讃美歌が続き、途切れると、司祭の短い言葉がそれに続いた。その言葉を追って讃美歌が重なり、ついには讃美歌と司祭の言葉は一体となった。えも言われぬハーモニーが最高潮になって堂宇に満ち満ちた時、何人かは目頭を押さえ、あるいは涙を流していた。

堂宇を離れても、大輔の感動は続いていた。司祭が何を言っているのか全く分からなかったのに、涙が出そうだった。自分で自分が不思議だった。意味はわからなくても、言葉にはリズムや音感や抑揚と言うものがある。その言葉を伝えようとする心の響きがある。そこへ讃美歌を歌う少年たちのハイソプラノが重なっていた。

大輔はこのことだけは思った。この旅行が何か見えない力で支えられているということ。誰にも頼らず、一人で旅すると意気込んで計画し、ここまで来たが、気がついてみれば見知らぬ多くの人に助けられていたんだ、と。

しばらく歩くと街のほぼ中心部、ベオグラード大学の図書館が近い一角に、中華レストランを見つけた。ベオグラードに着いてからというもの、体にも心にも疲れが出ているのを感じていた。それで、自分に中華料理をご馳走しようと思い定め、いかにも高級感の漂う中華飯店での昼食に決めた。店の入り口に「上海飯店」という看板があり、久々に字が読めたのも背を押してくれたのだった。

分厚い煉瓦の壁に囲まれた店は厳いかめしいほどの構えで、料金もきつと高いだろうと思つて覚悟を決めていた。重いドアを開けて入ると、店内は外から見たイメージよりかなり広く、天井が高いうえに、座席と座席との間隔が十分ある。文字通りの高級飯店で、気もそ

ぞろになった。ところが、ボーイが持ってきたメニューを見て、一切の懸念が吹っ飛ん

だ。どの料理も東京の値段より3割は安かった。急に大きな気持ちになり、グラスワインをオーダーし、酢豚、広東麺、ライスを頼んだ。麺がビーフンだったところを見ると、中華料理といっても台湾系なのだろう。しかし、満足度は大きかった。

大きな一枚板のガラス窓を通して道行く人が見える。昨日あたりから気温がぐんぐん上がっていて大抵が半袖姿だ。追加で烏龍茶をオーダーし、すっかりくつろいだ気分となった。ガラスの外は直ぐ石畳の歩道があり、向こう側の歩道を歩いている人も見える。ゆるい坂道を上がり切ったところのクネス・ミハイ口通りに向かっているのだろう。

〈待てよ！〉

烏龍茶の煎茶茶碗をテーブルに置き、反対側の歩道に走り出したくなった。何人かの通行人に混じって、トイレに消えた老人の後ろ姿がそこに有ったからだ。慌ててドアまで行き、

「ちょっと店を出たい。直ぐ戻る」とボーイに声をかけた。

出ようとして、旅行用の肩掛けバッグをテーブルに置いたままなのに気づき、慌ててそれを取って外に出たとき、老人の姿はもうどこにも見えなかった。

〈また消えたのか！〉

道路はそれほど広くはない。しかも直線で、路地はなさそうだった。どこかの建物に入っただのか？

少し不快な気分で飯店を出るとクネス・ミハイ口通りに上がった。そこは思っていたよりも大きな通りで、日曜日とあってか、車は乗り入れていず、首都の繁華街らしい殷賑が

見てとれた。通りの交差する四ツ角の中心部は小さなロータリーになっていて、広い通りの両側にはビルが連なっていた。ビルの向こうに、抜けるような青空が広がり、夏が近いと思わせる日の光だった。

〈あの老人はセルビアの人なんだろうか〉

何の予兆もなく現れ、忽然と消える老人。

〈俺は何であのジイサンを追いかけていけないんだ、未だ観光するところが残っている。そっちが優先だろう〉

そんなことを思いながら、通りに面したマックでコーヒーでも飲もうかという気分になっていた。と、マックの前の街路樹の下に、日差しを避けるようにしてあの老人が立っているではないか。もうかなり前からの知り合いに巡り合ったような気になって、老人に近づいて行った。

「こんにちは、少しお話し、いいですか？」こう切り出した。

「*&*+@**<>・・」

セルビア語か。こういう時にこそ、グーグル翻訳アプリだろう。日本語／セルビア語はないが、英語／セルビア語はある。

「私は大輔と言います。日本から来ました」

セルビア語が直ぐにアプリに表示される。それを老人に見せた。同じようにスマホめがけてセルビア語で喋ってくれ、と身振り手振りを交えて説明した。

老人は理解したらしく、スマホに向かって話した。

「*@*^PR+*@」

スマホ翻訳が機能しない。どうすればコミュニケーションが取れるんだ。この老人がテッサロニキからきた老人だということを確認したい。もし、そうなら、お礼の一言も言いたい。誰か英語・セルビア語がわかる人が助けてくれれば、意思の疎通が可能になる。思い切って、通行人に声をかけた。

「あのう・・・少し助けてもらえませんか？」

選んだわけではないが、30代くらいの女性だった。

「どうしました？」

英語が通じる。

「この老人と少し話をしたいんですが、私はセルビア語がわからないんです。手助けいただけませんか？」

「良いですよ、お安い御用です」

「このかたはギリシャのテッサロニキからベオグラードにこられたのかどうかを最初にお聞きしたい」

女性が通訳してくれた。老人は耳が遠いのか、素知らぬ顔を決め込んでいる。

「・・・この方、セルビア語、わからないみたいです」

セルビア人ではないのか。じゃあ、何語なら分かるんだろう。

思いついて、バルカン半島の国々が載っている地図を取り出し、見せた。どこの国なのか指差しして欲しいし、ギリシャから旅行してきたかどうかも確認を得たい。女性はそこを老人に伝えようと、手振りを交えて話をしているが、一向に埒が開かない。

「クロアチア語も分からないようですね。ギリシャ語は私も知らないで・・・、この方、

ギリシャかマケドニアの方じゃないかしら。そうでなかったら、全然違う国の人かもしれない

女性はお手上げです、というように両手を広げて肩を窄めた。これ以上手助けを求めるわけにもいかない。サンキューを言うと、「どういたしまして、お助けできなくて残念だわ」と笑顔を残して去っていった。

〈厄介な爺さんだ〉

これ以上の接触は無理だと判断したその時だった。

耳に、リズムカルな抑揚を伴った言葉が聞こえてきた。いや、言葉ではない、強いて言えば、単なる音だ。ペトカ教会で聞いた司祭の言葉か、澄んだ讃美歌のように、ストレートに心に響いてくる音だった。その音が脳の中で言葉になっていた。

『私の顔を良く見なさい』と。

そういえば、いつも、いつも俯いた姿しか見た記憶がないから、顔は見知っていなかった。

顔を覗き込む。それまでは「自分より少し年上のヨーロッパ系の老人」と勝手に決め込んでいたが、老人はもっとずっと老け込んでいて、顔に深い皺があり、目の淵から頬にかけて老人斑がいくつも浮き出していた。顔立ちは東洋系に見えた。思い出せないが、どこかで見たことのある顔をしていた。

何か言いたいし、聞きたいこともある。どうすればいいんだ。さっきの澄んだ音は連続して耳に響いている。その音に全神経を集中すると、

『私を追うのは止めなさい』と聞こえた。

ハッとなったが、老人は背を向けて、大輔から離れていった。

〈俺は彼を追いかけてなんかいない〉

クネス・ミハイ口通りにはさっきまでと何も変わらない人々の姿があった。立ち止まって談笑している人、腕を組んで歩いているカップル、背を丸め地面を見ながら歩くトシヨリ・・・青い空。その空を仕切っている重厚なビル。何事もなく人々が行き交うクネス・ミハイ口通りがそこにあった。

十、ブタペストのドナウ

大輔の頭の中はクネス・ミハイ口通りで出会った老人のことでいっぱいだった。ホテルの部屋に戻ってから、ずっとそのことを考えていた。老人がいった言葉、それは正確には言葉ではなく、大輔の耳に聞こえた音を、大輔が言葉に焼き直したものだが、意味は通っていた。それに顔だ。絶対にどこかで見ている。外に夕食を食べに行く気になれず、部屋に引きこもっていた。

途中で買ってきたハンバーガーにかじりつく。それをローファットミルクで胃に流し込み、缶ビールをグツと飲んだ。疲れのせいかな、あまりに強く緊張したためか、体がだるい。一陣の風が来て部屋の窓ガラスを揺すって行った。風の音を追うように外の景色に目をやったが、どんよりとした夕闇が迫っているだけだった。

気分転換。

テレビをつけた。ドナウ川とサバ川の氾濫の歴史を特集し放映しているようだ。画面がベオグラードから上流へ上流へと遡って空から見たドナウの映像を見せる。語り手の言葉

はセルビア語だから詳細は分からないが、大河川の氾濫のメカニズムと治水の歴史を辿っていることは理解できた。特に画面に度々映されたのが2013年というプロットで、ベオグラードでも被害が大きかったが、ブタペストでは死者も少なくなかったと画面に出ていた。プロットだけは英語表示だった。

ブタペストの街が映し出され、ドナウに沿った大きな建物が見えた。まだ丸井物産で穀物部のチーフ・マネージャーをしていた頃、もう20年以上前、ハンガリーを訪ねている。その後、こんなに大きな洪水があったとは知らなかった。画面が大きな建物をアップで映し出した時、それがドナウ川に面して建てられた国会議事堂だとすぐに分かった。独特の重量感を持ったゴシック建築で、建物が大きいだけでなく、荘厳な雰囲気を持っていた。

〈あっ！〉

一人の部屋で大きく叫び声を出した。

〈思い出したぞ！〉

大輔がハンガリーに行ったのは、ハンガリーが「人民共和国」から「共和国」に体制変更して間もなくの時だった。1993年のはずだ。小麦の新しい輸入先候補として、取引先のAライン、神港海運、横浜埠頭興業などの社員と合同で調査団を編成した折だった。ハンガリー国内のまだ未成熟な穀物グレインやカントリー・エレベータを見、市場をいくつか訪問した。協同組合組織が残っていて、店舗やオフィスを訪問したのもこの時だった。

一段落して、参加者18名全員がドナウメントを見がてら、ワイナリーを訪問する日程

が組まれていて、これはもう、観光行事だったから大輔は書類整理やらレポート作成があるからとホテルに一人残った。何もそこまで仕事熱心さを取引先の連中にアピールする必要もなかったが、正直、一休みしなかった。レポートを早々に済ませ、いくつかの資料と写真をネットで本社に送信すると、時間に余裕ができ、ホテルのすぐ近くにあるカチャーシー教会を覗きに行った。教堂の中ではパイプオルガンの演奏があり、自由に入場できたから、ミサに使われる椅子に座って、堂内いっばいに響き渡るパイプオルガンの音を楽しんだ。

すっかりいい気分になってホテルに戻り、ロビーのカウンターでグラスワインなど飲んでいた。ロビーの小さなステージではジプシーの奏でるバイオリンの曲が演奏されていた。ブタペストは音楽の街だ。

「ここ、良いかしら？」

後ろから声をかけられた。振り向くと、グラビアから抜け出てきたような女性が可愛らしく小首をかしげて立っていた。真っ白な肌、ブルーに透き通った目、スラリと伸びた肢体。ここはブタペストでも指折りの5つ星ホテル、変な女性は出入りしていないはずだ。宿泊客の一人だと思った。

「どうぞ」

声が弾んでいた。

「私、ロシアから遊びに来てるんです。あなた、どちらから？」

「俺？ジャパンから」

「お一人ですか？」

「団体さ、みんなドナウベントに遊びに行ってるよ」

「あなたは行かなかったんですか」

どうも会話が滑らかだ。女性は隣の椅子に腰かけたのだが、ゆったり目のスペースだから、気分に余裕はある。

「俺は仕事があってね、居残りさ。情けないよ」

「お仕事大変ですね。日本人は働き者って聞いているわ。あなたもそう？」

「ジャパニーズ・ビジネスマン！ワーカホリック！」

といったら、女性は口到手を当てて大笑いした。程よい距離感があると思っていたが、笑い声に混じって若い女性の甘い体臭が大輔の鼻腔をくすぐった。

「私は7階に泊まってるの、ジェンシカよ」

握手を求められ、自然の流れのように差し出された手を握ったら、その指先は骨も関節もないほどの柔らかな感触で、握り返してはこず、ただ真っ直ぐに指を伸ばして4指を握らせ、残った親指を大輔の指の背に軽く重ねてきた。

「あなたは何階のお部屋ですか？」

この質問は微妙じゃないか。どう答えれば良いんだ。

「11階」

即答していた。息が弾んでいたかもしれない。

するりと指を抜いた女性は、瞬きを二つ、三つしながら、

「あらっ、11階はエグゼクティブ・フロアーよ。勝手には入れないの。7階はスタンダード。エグゼクティブのお部屋は見たことないわ、素敵でしょうね」

決まったストーリーがあって、そちらに向かって事が進んでいるような気になっていた。

出かけた連中は夕食を済ませてから戻ってくる。今は未だ11時だ。

「お部屋見せてもらえたら嬉しいわ」

大輔も若かった。身体中の血が勝手に騒ぎ出していた。

「あのね、ええと・・・」と言いかけたところへ、銀髪をオールバックにした、蝶ネクタイの老紳士がそばに寄ってきた。

「お客さん、こちらの女性は、プロですよ。話はそこまで、終わりにしたほうがよろしいかと」

と小さく耳打ちしてきた。このホテルのマネージャーかと思って顔を向けると、にこりともせず、

「伝えましたよ」という態度で大輔から離れていった。

あのマネージャーらしき男の顔を思い出した。あの時の老紳士と同じじゃないか！

クネス・ミハイ口通りの老人に比べると少し若い印象はあるが、深い法令線の入った顔は独特で、今でも声をかけてきた女性と一緒に忘れ難い印象として残っている。

あれから、20年以上も経っているのに、彼の顔、髪、目、鼻、口、一つひとつが鮮明に思い出された。

「今日のジイサン、どこかで見た顔だと思ったけど、あいつか！」

と誤ってしまった。あの時の吉村の本心は11階の部屋にその女性を案内する道行きだったのだ。

しかし、冷静になって考えてみると、もし、彼女を部屋に誘い入れ、なるようになって

て、何かが起こったら、とんでもない事態になっていたかもしれないのだ。自分が団の幹事長だったことを失念していた。水を刺しにきた白髪マネージャーは大輔を救いに來たのかもしれないのだ。

あの男と今度の老人とは同じ人物だと勝手に決めてしまった。セルビアとハンガリーは国境を接している。ブタペストとベオグラードは車で4時間のドライブとガイドブックに出ていた。

へジイさん、ハンガリー人なんだ。それでセルビア語もクロアチア語も通じなかったのだ

十一、優との再会

トルコ航空 52 便は成田に 19 時 30 分に着陸した。

定刻より遅れたが、ベオグラードからイスタンブールまで1時間半、イスタンブールから成田空港までが11時間、都合12時間半飛行機に乗っていたし、エコノミークラスだったから、年金生活に入ろうとしている大輔にはいささかこたえた。それでも、予定の飛行機に乗って帰れたのはラッキーだった。

というのは、ベオグラードを発つ飛行機の時間が変更され、ヒヤヒヤものだったからだ。出発時刻の変更は大輔がバルカン半島を歩いているどこかの時点で広報されたのだろうが、大輔は飛行場に行ってからそのことを知った。イスタンブールでの乗り継ぎ時間は2時間近くあったのに、1時間とない逼迫した乗り換え時間になってしまった。到着便が遅れたらオシマイじゃないか。イスタンブール発の飛行機はフィックスで取ってあるか

ら、変更が効かないチケットだった。

おまけにベオグラード空港へは早めに着いたから、待ち時間が4時間以上にもなってしまう。空港の周囲には何もない。空港は到着便のビルと出発便のビルとが分かれていて、レストランやカフェなど出発便側はお粗末に思えた。こんなトラブルがあつての成田到着だったのだ。成田空港駐車場に預けた車を繰って自宅に戻った時は疲労困憊だったが、それは長い旅路を自力で乗り切って帰国した満足感を伴うもので、心地よい疲労感でもあつた。

しばらく体から精気が抜けて何もする気が起きない。こんな時に仕事でもあれば、気合を入れ直して出勤しただろう。今はそれとてない。やるべきことを何も持たない独り身の64歳には、24時間全部が自分の時間になったことで、大いに不自由が起きていた。

ダラダラと1週間が過ぎたところへ、思わぬ人から電話が来た。

「吉村さん、ヨーロッパに遊びに行ってたんですって？」

電話など、この5・6年、ついぞかけてきたことがない女だった。

「そんな話、どこで聞いたんだ。フェイクだよ」

「あーらそお、みんな知っててよ」

「まあ、いい。それで、何の電話なんだ、突然に」

「うーん。お土産があるかな、と思つてさ」

「音沙汰なしの月日が流れてだよ、俺は会社を辞めてだ、待ちに待った静かな余生に入っているところなんだ。そこへ予期せぬ電話だ。お土産だって？ 疲れるよ。全く変わつてないな、君は」

「おあいにく様、この歳ですからね、もう変わりようがないんです」

「長の旅から帰ったばかりで俺は今、猛烈に疲れているんだ、あんたと冗談言い合ってる場合じゃないんだよ」

「そおお？声、元気そうじゃない！どう？久しぶりに新橋の「夢工房」行ってみない？」
塩崎優、曲者だ。音信不通状態で6年近く経ったのに、散々人をコケにして、今更夢工房もないだろう。切れたはずの優がなぜ電話をよこす気になったのか、詮索しても仕方ない。おそらく彼女の気まぐれだろう。

「あそこは、憎み合っている男女が行くところじゃないぜ」

「あらっ、あたし達、憎み合ってなんかいないわよ。愛し合っているとはいわないけど」

「もう切るぞ、俺は忙しいんだ」

「あらら、……ちょっと、ちょっと。じゃあさ、吉村さん。四谷の「甘納豆」はどうかしら？」

「あのね……」

もう呆れてものが言えない。

「お願い！」

押し切られてしまった。甘納豆も二人で行ったことのあるスイーツの店だ。嫌な予感がする。優とは成り行きで2・3回ホテルに行ったことがあるが、妻の奈保子の突然の死に憔悴していた時期のこと、それっきりになっていたはず。不羈奔放ふきほんぼうの彼女にはとてもついていけない。

案の定、甘納豆での再会は終始優の主導権の下にあった。この力関係にも変わりはない

った。

「旅のお話聞かせて。一人旅でしょ、何か怖いことなかった？」

優は怖かった話を期待しているようだ。そっけなくしておくに限る。

「だいたい、予定した通りだったな」

顔を、テーブルにつきそうな位置まで下げ、横から鼻の穴を覗き込むような姿勢をしたかと思うと、

「嘘！」

と一喝してきた。

「その顔は・・・なんかあった顔だぞ」

と言う。

「一人で行ったんでしょ？どこ、どこ、の国に行ったの？」

「ギリシャ、マケドニア、コソボだろ、それと・・・クロアチア、ボスニア、セルビアかな。バルカン半島の6か国だ。一番長かったのはセルビアだね」

「結局何日旅していたんですか？」

「4月21日に出発して、戻ったのが5月17日だ。26日間かな」

「1ヶ月近くね、リタイア組は羨ましいわ」

「なってみれば、それほど魅力的でもないぞ」

「吉村さんて、昔から旅行好きだった？」

「誰だって旅行は好きさ。俺たちの祖先の新人類が7万年前にアフリカのナムビアを旅立ってから、人間はずっと旅をしているんだ」

「そんで、セルビアには何日いたの？」

「ベオグラードに着いた日を入れて5日だね」

「ふーん。どうだった？あちらの女性は」

「バカいえ、俺がそういう男じゃないの、知ってるだろう」

「ええっ？そういう男なんじゃないですか？」

「そうかあ？まあ、いいや。俺な、出発直前にちょっと足を痛めてな、日中歩くと、夜は痛くて、ナイトツアーどころじゃなかったんだ。外に出たくても出られないという事情があった」

「ほーら、ご覧なさい。ほんとに夜遊びしたかったんでしょ！残念だったけど、それで良かったのよ。無事に帰ってこられたのは足が痛かったおかげですよ」

口が達者な優には敵わない。完全に相手のペースに乗せられてしまっている。優のペースに巻き込まれたらどんなことになるか分かったものじゃない。

彼女への土産は全く予定していなかったから、カルメグダン公園で色々取り混ぜて何点か買った中からジョコビッチの写真が入ったキーホルダーを選んで持ってきた。テニスラケットを模ったもので、多分、優は喜ぶだろうと思ったが、想像以上に大袈裟な喜びようだった。優がテニスをしていることを知っていたから、ジョコビッチのホルダーを選択したのだった。

それにしても、優とおしゃべりしていると時間の経つのが早い。この間、ずっと一人きりの時間が続いていたから、人恋しになっていた。つい、ウキウキしてしまう。

「それでだ、突然の電話でお土産でもないだろう。メインテーマは何だ？」

「うーん、ちょっとね、環境が色々変わってね。世の中うまくいかないものだな、なんて今更思っているの。愚痴りたくなっただけ」

どうもわけありのようすが、こちらから聞く必要もない。面倒なことになるだけだ。

〈危ない、危ない〉

いい年のジジ・ババの組み合わせでおゼンザイを食べている客はなかった。抹茶をいただき、一息入れたタイミングでさっさ伝票を掴み会計を済ませた。

優は色白の美人系で、物産内部でも、取引先でも人気があった。仕事もテキパキとこなすし、物流本部・マテハン資材部の所属だったから、色んな部署との連携が求められていて、社内でも顔が広く、学歴も国立の一流大学を出ていて社内のコネもそれなりに持っていた。人気者で美人。仕事ができる才媛。肩書きはマネージャーとなると結婚など眼中になく、男どもを家来扱いしていたし、社内を闊歩していた。大輔とプライベートな関係になったのは大輔側に事情があったことはあったが、優の気まぐれ、つまみ食いだった。

十二、優の副業

甘納豆で会った1週間後、優がまた電話をよこした。大輔が無聊を託っていそうだと見当をつけたのだろう。

「この間のキーホルダー、ありがとう。さっそくテニスバッグにぶら下げたのよ。それで昨日はナイトテニスの日で、友達にキーホルダー見つかったちゃってさ、その子ね、猛烈なジョコ・ファンなの。私も欲しいって」

次の言葉は聞かなくても分かる。

「もう一つ手元にありません？」

「うゝん・残念だけど、1個残っているな」

「わーい！やったね！」

「そんなセリフを吐く年かよ。50を越しているじゃないか！」

「優ちゃん、そうはしゃぐなよ。未だあげるって言ってないよ」

「えっ？あげるって聞こえたけど」

「しょうがねえなあ、あんたのわがままは死ぬまで治らないな」

「うん。ごめんね。友達がさ、どうしても欲しいっていうから、吉村さんに在庫なかったら、このあいだ貰ったの、彼女にあげるキャないかな、と思って・・・ちょっと憂鬱な気分だったんだ」

「まあ、いい。わかった。あげるよ」

「ありがと！お食事、ごちそうさせてください。夢工房で」

優があそこにこだわる理由は推測できる。2人が初めてデートした南仏料理の店だからだ。彼女のことだから、初デートのことはとくに忘れて、単においしい料理に行きたいだけなのかもしれない。思考回路を読みきれないところがある。

夢工房はカウンター席が横一列で12席、奥に4人がけのテーブル席が2席しかない。予約は取らないし、順番待ちの客を立たせておくこともない。5時開店で、来た順に座る。つまり、満席になれば次の客を断る店だった。ともかく客にゆっくり食事を味わってほしいという趣旨を貫いている。噂では大臣が来てもルールの変更はしないとか。それで

も客は多いから、文句なく料理がおいしいのだろう。奥のテーブル席が空いていた。

「吉村さん、来てくれて嬉しいわ」

「断ったら殺されると思ったのさ」

「そんなこと、私がするはずないでしょ、愛しの吉村さんに」

「分かった、わかった。先にキーホルダー渡しておくよ」

コース料理で大輔は魚を頼んだが、肉食系の優はビーフで、ミディアム・レア。

「旅行のお話、未だ聞かせてもらってないわよね」

独特の目で見つめてくる。黒目が大きく、ぱっちりと目を開かれると吸い込まれそうな錯覚になる目だ。

「優ちゃん、その目は禁止だよ、クラクラする」

「あらっ、もうワインが効いてきたの？」

効くほど飲んではない。

「ベオグラードのこと、少し話してよ。テニスの友達に聞かれたの。彼女、ジョコの聖地を一度訪ねてみたいんだって」

「そんな話で良ければ」

キーホルダーを買った公園の話、砦の向こうにドナウが流れ、そこへサバ川が合流して、力強い流れになっていたこと、その景観は見る人を黙らせる力があって、みんなが川に向かって座り、静かに流れを見ていたことを話した。優はうん・うん、とうなずきながら聴いている。思わず話に力が入ってしまった。

ドナウを見た後、聖ペトカ教会というところに入ったら、ちょうどミサの真最中で、言

葉はわからなかったけど、感動があったこと、その後、不思議な老人と音で会話ができることを話した。優は大きな目をさらに大きくして大輔を見る。黒目が洞窟のように広がり、奥の暗闇に何かが潜んでいるように思えた。

「吉村さん、それは近年稀に見る面白いお話ですよ」

「そうか？ まあ、俺も不思議な体験だとは思っているけどな。ところで、優ちゃん。その大きい目で見るの、やめて欲しいな。吸い込まれそうで恐ろしいよ」というと、

「吉村さん、その老人のこと、もう少し聞かせて」と言う。目は大きく見開いたままだ。

大輔はギリシャのテッサロニキからスコピエに移動した時の体験をかいつまんで話した。

優は大きな深呼吸を一つして、

「吉村さんね、誰も知らない極秘のことですけどね、実は私、フォーチュンテラーなの。

こう見えてもタロット占いの名手よ。知らなかったでしょ。私、月に2回、新宿の小さなビルの一角でタロット占いしているの。このこと話すのは吉村さんが初めて」

大輔はもちろん知らなかった。

「そんなの、どこで覚えたんだ」

「自分で勉強したのよ。物産のミラノ営業所に3年間配属されてた時ね、占い館に通って修得したの」

「ふうん。それで、最近流行りの副業かい？」

「そんなじゃないわ。私、人の運命っていうか、未来っていうか、そう言うものに触れるのが好きなのよ。今、こんなに元気にしているのに、明日は事故で大怪我する、とか。

今は落ちぶれているけど、いずれ大きな会社を起業する人だ、とかね」

「人の将来を覗くのか。何だかな、・・・良い趣味とは思えんな」

「でもね、求められれば、アドバイスもするんだよ。車に気をつけましようとか、必ず目が出るから、悲観せずに頑張って、とかさ」

「そんなの、一般的なことじゃないか。アドバイスと言うほどのものじゃないよ」

「具体的な細かいアドバイスだって、求められればね、してもいいんです。だけど不思議にみなさん、詳細は求めて来ません」

優がそんなことをしていると夢にも思わなかった。ただ、彼女のことだから、徹底して勉強した可能性はあるだろうと思った。と同時に、この女、まだまだいくつか隠し事がありそうに思えた。

「吉村さんの経験はとても大事な経験よ。私、吉村さんに多分、話したと思けど、あなたはね、ふとした動作で、人を惹きつけることがあるって」

何言ってるんだか、と思う。

「奥さん亡くして寂しいだろうと思っていたのよ。人助けね」と言ったのは誰なんだ、と言いたい。しかし、優はそんなことはどこ吹く風でいる。

「今、吉村さんが話してくれたこと、吉村さんの不思議な魅力にも関係していることだと思うな。その老人はね、私たちタロットの言葉で言うと、光背霊ね。しかもあなたの場合は数の少ない守護霊よ。多くの人の場合、破壊霊とか荒神霊とかなの。怨霊、悪霊、背後霊の類よ。取り憑かれると苦しむ要因になるの」

「優ちゃん、あんたみたいな秀才が・・・、怨霊、悪霊かよ。似合わないし、馬鹿げているぞ」

「そう思う人はそう思うんでいいの。問題なしよ。だけど、誰でも説明のつかない不思議な体験ってしているものよ、普通にね。素直な気持ちで考えてみれば分かること。実際、あなた自身がその老人との不思議な体験をしたじゃないですか」

自信ありげに説明する優の態度を見ると、そんなこともあるかも知れない、という気持ち湧いてくる。危険な兆候だ。ワインの力と人を引き込む語り口で、6年前にはとうとうホテルに同行するハメになってしまったじゃないか。もう、その手は食わないぞ。

十三、毎日が日曜日

「一度タロット占いで見てあげるから、私の占い部屋に来てみない？」

と誘われたが、丁寧にお断りした。

「タロットで稼いでいる人はね、物産の部長クラス以上よ。私は定年過ぎたら、タロットを本業にするんだ」と言っていた。占いを口実にした詐欺の被害が出ていることを聞いたことがある。優が詐欺まがいのことをしているとは思わないが、フォーチュネリングなんて、そもそも根拠のない話だろう。彼女自身が自分の副業を人に話さないのは、どこか後ろめたい気持ちがあるからじゃないかと思ってしまう。才女と占い、結びつきようがない。今は趣味だと言っていたが、いずれ金が絡んでくることではないか。他に考えられない。

夢工房のフランス料理を遠慮なくご馳走になり、アイスクリーム、コーヒーの順で締めとなって優とは気持ちよく分かれた。

「優のやつ、とうとう本心を言わなかったな。50を過ぎて少し我慢を覚えたのだろう」

と思わないでもなかったが、料理のおいしさからくる満足感と充実感があった。優が複数の男と関係を持っていることを知ったし、自分は優の暇つぶし相手だとわかって、彼女とはキツパリと手を切ったつもりだった。

しかし、優の光背霊や守護霊の話は、言われた時には子供じみていると思ったが、何日かすると、優が言っていたことが頭の中で勝手に大きく育ち、膨らんできた。

「守護霊と言ってもね、安心はできないのよ。いつ気が変わって破壊霊に変身するか、わからないから。自分は守護霊に守られている、なんて安易に考えちゃダメ。吉村さんもそのへん心に留めておいた方が良くってよ」

優が別れ際に言っていた言葉も気になる。しかし、彼女はその後何も言っていない。た。あいつとの関係が復活することを恐れていた大輔だったが、何も言っていないとなると変に気になる。

へあいつの誘いに乗って占い部屋に行っても良かったかな

なんて考え始める。それと言うのも、大輔には毎日これと言って決まった予定がなく、近所のカフェの会員になったり、わざわざ隣の町まで電車に乗ってコーヒーを飲みに行ったりにすることに嫌気がさしていたのだった。退屈なんていうシロモノではない、腰のあたりがフワフワして体が浮いているような感覚なのだ。一種の適応障害に似ている。生活環境の激変がストレスとなって、うつ状態になっているのだろう。仕事や職場の人間関係がストレスになるのは良くあること。昂じて適応障害になった同僚のことは聞いているが、リタイアして自由になった人がストレスを受けた話は聞いていない。

今年の誕生日を過ぎれば65歳になるが、体が自由に動くことが、今はかえって負担に

なっている。隠居部屋に入って晴耕雨読の日々とはいかない。かといって、蕎麦打ち道場は嫌だ。市民農園通いも病院通いもごめん被りたい。この雲を掴むような空虚な気持ちが精神的な危うさになって、優からの意味不明なジャブを待っているような事態を生んでいる。自分でも情けない。

「会社に散々尽くして、身を粉にして働いてさ、歳をとったらポイツ。会社なんてそういうところでしょ。経営者が口当たりの良いことを言っても、彼らの腹の底にあるのは、社員は会社の単なるリソースの一部ということよ。私は自分の道を行くの」

今になって自分の半生を顧みると、優が言っていたことも、あながち的外れだとはかり言っていない。

城山三郎の「毎日が日曜日」を思い出す。そして、今日はその日曜日だった。

十四、秘湯・松波温泉

トーストにコーヒー、サラダを少々。昨日のサッカーの結果をプレミア、リーグ、セリエと順次ネットでチェックし、さらにブンデス、Jリーグまでチェックした。それが終わったら新聞に隅々まで目を通す。新聞を読み切ると、次の予定がない。これじゃ、ボケる前に死んでしまう。この1週間、バルカン半島の旅の写真を整理していたが、それも簡単に終わってしまった。デジタルの世界は物事が早く片付きすぎる。風がでてきたのか、窓の外に見える隣との生け垣がサワサワと揺れている。隣に最近越してきた若夫婦は共働きだと言っていたから出かけて家は留守になっているだろう。さて、これから何をするか、こんな日常が死ぬまで続くのか。

〈たまらんな〉

新聞をもう一度手に取って、現役のころには邪魔くさいと思っていた広告欄などに目やる。お一人様参加の日帰り旅行が案内されていた。参加するつもりはさらさらなかったが、その広告記事には「秘湯を訪ねる旅」と言うシリーズものが出ていて、案内されている6箇所の訪問先を丹念に見た。地蔵ヶ岳の秘湯・松並温泉―奈良木川の鮎釣り温泉の旅―という企画に関心を持った。

〈松並温泉？聞いたことがないな〉

「龍神山系・地蔵ヶ岳の山麓にある隠れ湯」と表題が打たれていて、東京からの日帰りバス旅行。「お一人さま歓迎、昼食付き・入浴券と入漁券込みの参加費1万5500円。釣具のレンタルは別途3000円。先着30名さま」という案内だった。6月4日からの鮎釣り解禁に合わせ、奈良木川での友釣り2時間がスケジュールに入っている。釣りを楽しみ、温泉で食事をし、秘湯で風呂を浴びて地蔵ヶ岳山麓の森林浴まである。早朝7時に出発して夕方7時に東京に戻る、結構欲張ったコースが組合わされていた。簡単な地図が添えてある。瞬間、面白い旅程だと感じた。

〈車を運転して自分で行ってみよう〉

日程を6月11日の日曜日と決め、旅行アプリで旅館を探し、予約を済ませてから松並温泉・浄土館に電話した。日曜日の夜に泊まる客は少ないだろうとの見立ては当たっていた。

「一人で鮎釣りを兼ねて行こうと思っているんですが、入漁券はそちらで手配できますか」

「一泊の予約をされている方ですか？釣りの予定は日曜日ですか、それとも翌日ですか？」

と聞かれ、

「予約をした吉村大輔と言います。釣りは月曜日にしたいと思っています」と答えた。

「それでしたら、地元の漁協に言うておきます。遊漁券は一日券で別途2000円ですがよろしいですか」

「それをお願いします。鼻環、サカサ、交換用のハリまで釣り道具一式、オトリ鮎も願っていたんですが、お願いできますか？」

「良いですよ、ウチの釣具とオトリをご用意します」

「一式でいくらになりますか？」

「お泊りのお客様は無料です。お車で見えますか？」

「はい、その予定です。・・・って、お迎えもありますか？」

「希望されるなら、関東本線の蕨垣駅までお迎えにあがりますけど」

「お迎えありますか！ありがたい。ではそれをお願いします。蕨垣駅到着の時間は後ほど連絡します」

「かしこまりました。連絡お待ちします。配車の都合がありますので、できればお早めに連絡いただければ助かります」

「スマホの時刻表を見てすぐお知らせするようにします」

「ありがとうございます。お食事の予約はいただいています、希望の時間も合わせてご連絡いただけるとありがたいです」

「了解！」

で、名前と電話番号などを確認し、すっかり予定が決まった。鮎の友釣りは何年かぶりだ。さっきまでの無聊感が吹っ飛んでウキウキしてくる。未だ1週間も先のことなのに、頭は温泉と鮎釣りモードになってきた。それだけ他に考えることがないという証拠でもあった。

お迎えつきの温泉旅行、鮎釣りこみ。空いている日曜日の1泊。割安料金。

これぞ、リタイア組の特典セットだ。気分の良い旅館なら、もう1泊したっていいし。ネットでググってみると、松並温泉の背後に迫る地藏ヶ岳の山頂付近には、賽の河原というところがあるようだ。山の上にある河原というのが面白い。延泊するなら、トレッキングするのも悪くない。

すっかり上機嫌になった大輔だったが、いつときの高揚感が落ち着くと、また不安感が戻ってくる。何かが足りない。この落ち着きのない浮遊感はどこからくるのだろう。心に小さく開いた穴を埋めるには思いつきり、外の空気を吸って、運動することかな。

思い立つとすぐ取り掛かれる気軽さ、ジャージに着替えて、ジョギングスタイルで外に出た。大輔の家は住宅街の中にあるが、背後は多摩丘陵と緑地が続いている。樹々は薄緑から青みを帯びた濃い色に変わろうとしている。6月に入っただけ。暑さには未だ日があるし、寒さは遠ざかった。いい季節だ。約1時間、頬や耳に風を感じながら、軽く7キロを流した。

表通りに出て、交差点で信号待ちをしていた。

胸、腋、背中にうっすらと汗が滲んで、心地良い疲れがあった。信号が変わって、停車

していた車が動き出す。大輔も青信号を見て、横断歩道を渡ろうと動き始めた。横目に、直進車と右折車が同時に動いたのは見えた。刹那、ゴンツと大きな音がして、砂ほこりがたった。雲が垂れ込め、あたりが急に暗くなった。しばらくすると、交差点は人だかりがして、誰かが叫んでいる。女性の甲高い声だ。さっき急発進した右折車から老人が降りてくるのが見えた。

へまた現れたのか、じいさん！もう、いい加減にしてくれへ

声をかけたりはしないつもりだ。話もしたくない。相手も迷惑そうにしている。

そんなことより、松並温泉行きの細かい日程を先に決めなければならない。駅に出迎えてもらうことを約束したから、列車の到着時間だけは早く知らせておきたい。電話ではなく、メールにしよう。証拠が残るから電話より確実だ。交差点はなんかゴタついている。少し離れたところで電車の時刻をスマホでチェック、浄土館にメールした。

返事のメールがすぐ来た。

『今、運転手が駅に迎えに行っております。改札を出て、ロータリーの左手に浄土館の名前の入ったライトバンが停まっていますから、それに乗ってください』と。

素早い対応は嬉しいが、早すぎないか。日時を1週間間違えているんじゃないか。疑問が湧いてくる。おかしいと思う内に、細い声の車内放送が聞こえてきた。

「この列車はまもなく蕪垣駅に到着いたします。左側のドアが開きます。お忘れ物のないようにお降りください」

へ俺も随分と手際が良くなったものだ。特段の荷物はないし、心の準備は出来上がっていたからなへ

ライトバンのドライバーは浄土館のメールに書かれていた通り、駅の左手ロータリーに待機していた。未だ肌寒さが残っているというのに、赤ら顔のドライバーはランニングシャツで、下はショートパンツだった。

「やあ、やあ。お迎え、すまないね」

と声をかけたが、返事はない。

「もう、チェック・インできるのかな」

ドライバーはそれにも答えない。なんて無愛想な。

「お客さん、明日鮎釣りに行く奈良木川を回ってみるかい？」

と聞いてきた。こっちの聞いたことには答えないで、自分の言いたいことだけは言うのか。

「遠いの？」

「いや、直ぐだ」

「じゃあ、ちょっと寄るだけ、見るだけ、で行ってみるか」

と答えた。未だ4時過ぎたばかりだから、明るい。6月の太陽が地藏ヶ岳に沈むまでには未だ間がある。鮎のハミあとの残るポイントなどチェックできるかもしれないと思った。

「車はここまでだ。この先は狭くて車は入れない。道は曲がりくねっているけど、川までは一本道だから歩いてくれ」

「歩くのかよ、何分くらい？」

「5分とかからない、直ぐだ。俺はここに停車している」

まあ、良いかと車を降りて歩き始めたが、背の高い葦の間の道は確かに狭く、ウネウネと

していて先が見えない。ドライバーは5分と言ったが、もう5分以上歩いている。スマホをポケットから取り出してナビを開く。現在地がすぐに出て、川まではあと2・30メートルの距離だった。

大輔がそこで見たのは、広々とした河原と向こう岸が霞んで見えるほどの大河だった。

十五、黄金の船

ロングテールボートが去っていくと、薄闇が河原を包んできた。

松並温泉のある集落まで歩いて行こうと思ったが、ドライバーが待っていることを思い出した。無碍にはできない。葦の茂る道を戻った方がいいだろう。旅館の出迎え車とはいえ、黙って行ってしまうのは失礼というものだ。河原の丸い石を一つ蹴飛ばす。

と、葦原の方角から人の話し声が聞こえてきた。2・3人ではない。かなりの人数に思える。鮎釣りのポイント探しなのか、それとも、こんな時間に釣りをしに来たのか。葦の茂みに入らず、河原でちょっとした間待っていると、7・8人の集団がノソノソと歩いて来た。荷物は何も持たず、手をだらりと下げているから、いかにも疲れた集団に見えるし、服装が白一色というのも奇異だ。男も女もいるが年齢は総じてかなりいつている。先頭の人が大輔を認め、声をかけて来た。女だった。

「あらっ、こんなところで人に会うなんて！めずらしいわね」

と言って後ろに続く集団を振り向き、全員に同意を求めた。促されて、全員が無言でうなずいている。

「あなた、船を待っているんですか？」ときた。

「いえ、私は鮎釣りのポイントを確認に来たんです」

「なんですって！ あなた。鮎釣りですって！ここで殺生はなりませんよ！」

前に垂れた毛を手櫛でかき上げ、女は目を剥いた。後ろの男が怒鳴る。

「そこに突っ立てられちゃあ、迷惑だ。どけよ！」と。

大輔が道を開けると集団は川に向かってゾロゾロと歩いて行く。川下から噴き上げてくる風が一行の誰・彼の違いもなく裾をひらひらと煽って川上へと抜けていった。

〈変な連中だ、何かの、宗教団体の一行だな〉

そう思ったが、集団が川の淵に行き着くと、川上から黄金色に塗装された船がゆっくりと現れて停泊した。夕日を背に受けて船は輪郭を曖昧にしているが黄金色の船体が浮き出るように美しく見えていた。

船から呼び声がする。

「お迎え船が着いたぞう。お迎えが来たぞう」と叫んでいる。飛鳥時代の遣唐使船か安徳天皇の御座船かと思ふ横行闊歩の船で、集団はその船を目掛けて川岸から浅瀬を水に浸かりながら小走りで船に向かう。船を川岸のギリギリまで寄せてきたところを見ると、よほど船底の浅い船のようだ。縄ハシゴが降ろされ、集団は1人ずつ梯子を登っていく。船長らしい男が舳先に出てきて声をかけてきた。

「そのオマエ、お前も乗るか」

どうしよう、一瞬迷う。黄金に輝く船体を見ていると体も心もどんどん引き込まれていく。

〈俺は白い服を着ていない。ジャージだ。こんな姿じゃまずくないかな〉

船長の後ろには錫杖を持った二人がお供で立っている。船長も上半身裸だがお供の二人も裸で、船長は赤い鉢巻きを締め、それをひらひらと後ろに長く流している。下はショートパンツだ。お供の鉢巻は船長に比べたらずっと短く、それをきりりと締めていた。色は朱色。いずれの顔にも眉がなく異形で、赤銅色をしていた。

と、船長の後ろに少し痩せた女性の姿が現れた。

「乗っちゃダメ！」

と大輔に向かって叫んだ。

「奈保子か！なんでその船に乗っているんだ？」

「訳はいいから！乗っちゃダメよ！」

という叫びと船長の太い腕が奈保子を横殴りにするのが同時だった。

「女！黙っている！あいつが自分で決めることだ」

倒れた奈保子に罵声を浴びせた。お供の二人が錫杖で奈保子を打擲ちやうちやくしている。立とうとするところを、髪をつかんで引きずる。

「ヒーーーーッ」

細い叫び声を残して奈保子は大輔の視界から消えた。

それでも大輔への呼びかけは途切れ途切れに聞こえてくる。

「戻る・・・のよ！」「ダメよ！・・・乗っちゃ」

「奈保子！」

大輔は思いっきり名前を呼んだ。しかし、船長は催促してくる。

「オマエ、乗るならさっさと乗れ！」

奈保子の叫び声はどんどん遠くなっていく。

へさつき乗り込んだ人たちは何をしているんだ。女が杖で打たれているんだぞ。何て冷たい連中だ。奈保子、俺が助けに行くからな

微かに聞こえて来るのは、

「早くそこを離れて！」という奈保子の必死の声だった。

その声も聞こえなくなって、船長も、お供の二人も甲板から姿が見えなくなり、黄金の船は岸を離れて行った。静寂を取り戻した川面を、船が滑るように薄闇の中に消えて行く。奈保子の叫び声だけが耳に残っていた。去って行く船を見ていたら、胸が詰まり、切なく、涙が溢れてきた。その涙は氷のように冷たい。涙の粒が氷の粒のようになって頬を冷ややかに伝わって行く。

その冷たさで大輔は目が覚めた。

鼻と口を覆って酸素吸入用のマスクが着けられている。腕には点滴の針が差し込まれ、腕はベッドに固定されていた。顔も、体も動かない。薄ぼんやりとした視界ではあるが、目だけは見える。ゆっくりと目を動かしていく。部屋の輪郭、機材、照明をぐるりと眺め、自分が病院にいるのが分かった。

〈俺は車に当てられたのか〉

理解したが、痛みも何もないのに、全身が小刻みに震えている。

〈寒い〉

この寒さ、なんとかならないか、と思って部屋をもう一度ぐるりと見ると白衣を着た3人が立っていた。一人は聴診器を首にぶら下げている。若手の医師といった印象に見える。

主治医だろうか。その後ろは女性で、一人が白衣の胸の辺りに記帳用のパネル版を乗せ、それを両手で支えている。もう一人は何も持たず、立っているだけ。主治医が連れてきたお供の感じだ。錫杖は持っていない。目は開けたか開けないかだが、部屋の中はすっかり見えていた。それにしても思う。

へこの寒さをなんとかして欲しい

口は酸素吸入のマスクで塞がれていて何も言えない。

ドクターが額に柔らかく手を当ててきた。

「うん、熱は下がったようだな」

パネルを持っている女性が、多分看護師なのだろう、素早く熱を測って記録する。非接触型体温計というやつだ。

「7度3分です」

と言い、続いて、突っ立っていたもう一人の看護師が

「心拍数80、呼吸数11、血中酸素92、血圧73／51、Q R Sにわずかな異常あり」

と機器を見て、指差し呼称している。一人は持っているパネル板にそれを記録する。

「よしっ。回復軌道に入っている。家族が到着したら、経過を説明するから、私にすぐ連絡してくれ。今夜が山だ。頭を強く打っているからな、油断はならんぞ」

緊張感のある声が小気味良い。2人が「はいっ」と声を揃えて応答したようだった。医師は2人の女性を振り向くとドアの方に顎をしゃくった。お供の2人を従えらるとおもむろに病室を出て行った。

十六、死者の伝言

医師と2人の看護師が部屋を出ていくのが見えたが、意識は朦朧としていた。部分部分はハッキリしない。さっきだって目が覚めて部屋の中を目で追うことができたのに、ドクターはそのことに気づきもせず、大輔に一言も声をかけないで出て行った。大輔が目覚めているようには見えなかったのだろうか。目を開けていたつもりだったが実際はほとんど開いていなかったのかも。

へしかし！俺は黄金の船に乗らなかったんだ！

と言いたい。

と、三人が出て行ったのとあまり間をおかず、違うドクターが入ってきた。今度は一人だった。白衣を着てベッドの脇に椅子を置き、腰掛けると大輔の顔を静かに眺めている。

静かで、細い息遣いを感じる。聴診器はぶら下げていない。額に手を置くと、その手で髪を撫でてきた。何とも言えない心地の良さだった。

「目を開けられたら、ワシの顔を見てごらん」と小さな声が聞こえた。

瞼が重くて、なかなか開かない。力を込め、力を込めして薄目を開けた。

「おう、おう。開けたか」

笑い顔がそこにあった。

「ワシが誰だかわかるな」と言う。

小さく頷いた。

「ワシは92歳だ。分かるな。27年後のオマエだ。よくぞ船に乗るのを拒んだ。奈保子も

良くオマエを助けた。ずっと知らん顔していたが、土壇場で現れた。いい嫁だ。まあ、アレが入院した時にはオマエが真剣に看病したからな。その思いがアレの気持ちに残ったんだろうな」

細い声だが遠くにいる人に話しかけているような感じだ。この老人がバルカンの旅の時に現れた人なのか。ブダペストで顔を出したのもこの老人なのか。

「いずれにしても、オマエがああ船に乗るのは27年経ってからだ。その時、ワシとオマエは入れ替わる。ワシはオマエに長いこと付き添ってきた。ワシと入れ替わったら、今度はオマエが若い自分に付き添うのが宇宙の輪廻だ。こうしてぐるぐると回っている。分かるな、このこと。回りながら、それまでの長い経験が次々と脳の奥深くに蓄積していくんだ。生命は続いている。途切れることがない。これを次のオマエに忘れず伝言してくれ」

短い話のようにも、長い話のようにも思える。意味をよく飲み込めない。疲れた。もうこれ以上の話を聞く力はなかった。話しかけてくる声はどんどん遠くなっていく。

「肉体はDNAが通過していく媒体のようなもので、自分であって自分でない。存在しているようで存在していない。無限の世界から来て無限の世界に去っていくんだ。わかるな、このこと。ワシはオマエであってオマエでない」

もう何を言っているのか判別つかないほど朦朧としていた。点滴の薬が容赦なく体に刺さり込んでくる。回復させようとしているのか、痛めつけようとしているのか、何のための薬なのかさえ分からない。遥かかなたの声、

「オマエの体には後遺症が残るが、頑張れよ。そのハンディがやがて幸運に繋がる時が来る。「黄金の船」を拒む力があつたオマエだ。これからの27年、自信を持って生きろ」

声は消えかかってか細く、次第に遠い世界へと消えて行く。邪魔な酸素吸入器を自分で取り外す力がない。バルカンの旅のお礼もまだ言っていない。消えてしまう前にひとこと言わなくちゃあ。氣力を懸命に振り絞っているが、思考力を徐々に失って大輔は深い眠りに落ちていった。